学力検査問題［国語］（その一）

（2024 ― 般 Ⅰ）

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1 次の文章を読んで、問一～問六に答えよ。

キリスト教が人間中心的な宗教だというと、不審に思う人があるかもしれない。ごく常識的には、キリスト教の全盛であった中世は、いわば神中心の世界であり、ルネサンス以後、ようやく人間中心の世界が誕生したといわれる。そのような立場にたてば、キリスト教に人間中心主義のレッテルを貼るのは、とんでもないあやまちになりかねない。

けれども、(1)このような理解は、あくまで、ヨーロッパの枠内でのはなしである。ヨーロッパという井戸のなかにはまりこんでしまえば、たしかに、近世以降の歴史を人間の神からの解放ととらえることもできる。しかし、一歩ヨーロッパをはなれて、日本人の視角からみれば、局面はまったく変ったものになる。とくに、近代科学の成立過程は、そのための絶好の例を提供する。

周知のように、近代科学の発展には、二つのドラマチックな大騒動があった。一つは地動説をめぐって十六、十七世紀におきたものであり、もう一つは十九世紀の進化論を中心にするものである。これらがドラマチックであるのは、(2)いずれの場合も、問題が専門学者のあいだの論争にとどまらず、ひろく世間一般をさわがせたからである。

地動説というと、象徴的なのは、一六三三年、ローマの異端審問所にひきだされたガリレオ・ガリレイのあわれな姿である。かれは、学説取消しをセン①イしたあとで、「それでも地球は動く」とつぶやいたと伝えられるが、これはうそである。当時七十歳の高齢に達していたかれに、そんな気力のあるはずもない。三十年あまり前に同じく地動説を奉じて焼き殺された、ジョルダーノ・ブルーノのことを思いうかべながら、みじめな敗北感にとりつかれたのがほんとうであろう。

地動説が排撃されたのは、カトリック教会だけが頑冥だったからではない。宗教改革者のルターやメランヒトンも、地動説にかんするかぎり態度は同じであった。**A**、当時の社会一般に反地動説的な底流があり、それをたまたま権力をにぎっていたカトリック教会が代弁したとする方がよい。この点では、地動説の開祖コペルニクスが、書物の出版と同時に死去したのは、かえって幸福だったかもしれない。

進化論になると、時代がだいぶあとになるだけに、多少、事情はちがう。ダーウィンはもはや生命の危険にさらされることはなかった。それでも、かれのもとには、いろいろな抗議や非難が殺到した。学界は別として、「人間は猿の子孫かもしれない」との進化論的立場に対する反感は、一般にはなかなか消えないのである。カトリック教会を例にとれば、進化論の立場にたつことが正式に信者の義務違反でなくなったのは、わずか十年あまり前の一九五〇年のことである。

これに対して日本では、近代科学の発展に対する抵抗は、まったくといってよいくらい見あたらない。地動説が日本に伝えられたのは一七七二年（安永元年）であるが、べつになんの騒ぎもおこっていない。ただ、一部の仏僧が※梵歴運動をとなえて反論をだしたが、それもせまい知識人サークルのなかでの対立にすぎず、世間一般はきわめて平静であった。

明治になって伝えられた進化論の場合も、事情は同じである。**B**、東京大学の動物学教授であった(3)アメリカ人モースは、日記につぎのように書いている。

一八七七年（明治一〇年）十月六日、土曜日。今夜私は大学の大広間で、進化論に関する三講の第一講をやった。教授数名、彼等の夫人、並に五百人乃至（ないし）六百人の学生が来て、殆ど全部がノートをとってゐた。……聴衆は極めて興味を持ったらしく思はれ、そして、米国でよくあったやうな宗教上の偏見に衝突することなしに、※ダーウヰンの理論を説明するのは、誠に愉快だった。講演を終った瞬間に、素晴しい、神経質な拍手が起り、私は頬（ほお）の熱するのを覚えた。日本人の教授の一人が、私に、これが日本に於けるダーウヰン説或ひは進化論の、最初の講義だといった。私は興味を以て、他の講義の日を待ってゐる。

（石川欣一訳『日本その日その日』）

モースにすれば、あるいは拍子ぬけした感じだったかもしれない。当時の段階では、かれの祖国アメリカで進化論を説くのは、たいへんなことだった。無理解な非難にさらされるのを覚悟しなければならなかった。ところが気おいたって日本に来てみると、攻撃されるどころか、逆に拍手で迎えられたのである。

こうした地動説や進化論に対する日本人の平静な態度からみると、ヨーロッパの場合は、なんとも不思議である。だいたい、地球が動こうと動くまいと、人間が猿の子孫であろうとなかろうと、現実の日常生活にはべつにさしさわりはないはずである。**C**、ヨーロッパでは、学問の(2)素人までが、なぜ、そんなむつかしい問題をとりあげてさわいだのであろうか。

ここで、わたくしたちは、地動説や進化論に抵抗したキリスト教の正統的な立場が、実は、きわめて人間中心的なものであったことに注目する必要がある。地動説に対するのは天動説であるが、これは、人間の住む地球を全宇宙の中心と考え、地球は動かないという前提で、すべてを説明しようとする立場である。進化論を拒否するのは、人間中心主義の出発点である、人間と動物の断絶を強調する立場である。そこには、神の創造物のなかで人間があらゆるものに優先するとの思想が(3)イッカンしている。

このように考えると、地動説や進化論が大騒動をひきおこしたのは、結局、それらが、キリスト教のかげにかくれた伝統的な人間中心主義に挑戦するよ

学力検査問題［国語］（その二）

（2024 ― 般 Ⅰ）

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

うに思われたからである。人間も人間の住む地球も万物の中心でなくなることが、当時のヨーロッパ人に堪え切れなかったところに、真の原因がある。科学と宗教の対立というのは、あくまで表面だけの現象である。

D、その後の歴史の示すとおり、近代科学の勝利はあきらかである。科学に対するキリスト教のカンショウ④がなくなっただけに、今日の方がかえって人間中心主義的といえるかもしれない。しかし、これは、さきにもふれたように、ヨーロッパという枠のなかでのはなしである。日本人としてみれば、ヨーロッパの思想には、いまもむかしも、人間中心主義の伝統がある。地動説と進化論をめぐる二つの大騒動は、その人間中心主義が、中世的なものから近代的なものに転換する陣痛の苦しみだったのではなかろうか。

ヨーロッパでしか近代科学が誕生しなかったのは、もともと、キリスト教が、人間中心主義の立場から、まがりなりにも、森羅万象を説明する統一的論理を構築していたからである。近代科学は、ある意味では、そのできあがった論理をひっくり返し、別の形で再構成したものにすぎない。いわば、キリスト教自体が近代科学の芽を内包していたことになる。④

このようなことは、人間中心主義でなく、ザヴィエルによれば、「世界の創造を始め、太陽、月、星、天、海、地、その他あらゆる事物の創造に関する知識が一つもない」日本の宗教には、とても期待できない。ヨーロッパの思想的伝統にとって、人間中心主義がいかに根源的なものであったか、あらためて確認しておかなければならない。

（鯖田豊之、『肉食の思想』より）

※ 本文の漢字にふりがなを付けた箇所がある。また漢字の旧字体を現代表記に直した箇所がある。

※ 梵歴運動　ぼんれきうんどう。近世末期における仏教系の思想運動。
　ダーウキン　「ダーウィン」と同じ。

問一　傍線部①～④についてカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなを記せ。

問二　空欄**A**～**D**に入るべき語を、**ア**～**エ**から選び、記号で答えよ。

ア　もちろん　**イ**　にもかかわらず　**ウ**　むしろ　**エ**　たとえば

問三　傍線部（1）「このような理解」とは、どのような内容か。五十五字以内で説明せよ。

問四　傍線部（2）「いずれの場合も、問題が専門学者のあいだの論争にとどまらず、ひろく世間一般をさわがせた」とあるが、この原因と考えられることとは何か。解答にあたる箇所を含む一文を文中から抜き出し、はじめの七字を記せ。

問五　傍線部（3）「アメリカ人モースは、日記につぎのように書いている」とあるが、モースは進化論に関する当時の日本人の受けとめをどのように感じているか。三十字以内で説明せよ。

問六　傍線部（4）「キリスト教自体が近代科学の芽を内包していた」とはどういうことか。本文の内容を踏まえて六十字以内で説明せよ。

学力検査問題［国語］（その三）

（2024 － 般 Ⅰ）

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2 次の文章を読んで、問一～問八に答えよ。

オオバコは、舗装されていない道路やグラウンドなど踏まれやすい場所によく生えている。じつは、(1)オオバコは踏まれやすい場所に好んで生えているのである。

オオバコは競争に弱い植物なので、他の植物が生えるような場所には生息できない。そこで他の強い植物が生えることのできないような踏まれる場所を選んで生えているのである。

オオバコは踏まれに強い構造を持っている。

オオバコの葉は、とても柔らかい。硬い葉は、踏まれた衝撃で傷つきやすいが、柔らかい葉で衝撃を吸収するようになっているのである。しかし、柔らかいだけの葉では、踏まれたときにちぎれてしまう。そこで、オオバコは葉の中に硬い筋を持っている。このように、柔らかさと硬さを併せ持っているところが、オオバコが踏まれに強い秘密である。

茎は、葉とは逆に外側が硬くなかなか切れない。しかし、茎の内側は柔らかいスポンジ状になっていて、とてもしなやかである。茎もまた硬さと柔らかさを併せ持つことによって、踏まれに強くなっているのである。

ヘルメットが、外は固いが中はクッションがあって柔らかいのと、まったく同じ構造なのである。

「［　A　］」という言葉がある。

見るからに強そうなものが強いとは限らない。柔らかく見えるものが強いことがあるかも知れないのである。

昆虫学者として有名なファーブルは、じつは『ファーブル植物記』もしたためている。その植物記のなかで、ヨシとカシの木の物語が出てくる。

ヨシは水辺に生える細い草である。ヨシは突風に倒れそうになったカシの木にこう語りかける。カシはいかにも立派な大木だ。しかし、ヨシはカシに向かってこう語りかける。

「私はあなたほど風が怖くない。折れないように身をかがめるからね」

日本には「［　B　］に風」ということわざがある。カシのような大木は頑強だが、強風が来たときには持ちこたえられずに折れてしまう。ところが、細くて弱そうに見える［　B　］の枝は風になびいて折れることはない。弱そうに見えるヨシが、強い風で折れてしまったという話は聞かない。柔らかく外からの力をかわすことは、(2)強情に力くらべをするよりもずっと強いのである。

柔らかいことが強いということは、若い読者の方にはわかりにくいかも知れない。正面から風を受け止めて、それでも負けないことこそが、本当の強さである。ヨシのように強い力になびくことは、ずるい生き方だと若い皆さんは思うことだろう。

しかし、風が吹くこともまた自然の①セツリである。風は風で吹き抜けなければならない。自然の力に逆らうよりも、自然に従って自分を活かすことが大切である。

この自然を受け入れられる「柔らかさこそ」が、本当の強さなのである。

オオバコは、柔らかさと硬さを併せ持って、踏まれに強い構造をしている。

しかし、オオバコのすごいところは、踏まれに対して強いというだけではない。

オオバコの種子は、雨などの水に濡れるとゼリー状の粘着液を出して②ボウチョウする。そして、人間の靴や動物の足にくっついて、種子が運ばれるようになっているのである。オオバコの学名は Plantago。これは、足の裏で運ぶという意味である。タンポポが風に乗せて種子を運ぶように、オオバコは踏まれることで、種子を運ぶのである。

よく、道に沿ってどこまでもオオバコが生えているようすを見かけるが、それは、種子が車のタイヤなどについて広がっているからなのだ。

こうなると、オオバコにとって踏まれることは、耐えることでも、克服すべきことでもない。もはや踏まれないと困るくらいまでに、踏まれることを［　C　］しているのである。

「逆境をプラスに変える」というと、「物事を良い方向に考えよう」というポジティブシンキングを思い出す人もいるかも知れない。

しかし、雑草の戦略は、(3)そんな気休めのものではない。もっと具体的に、逆境を利用して成功するのである。

たとえば、雑草が生えるような場所は、草刈りされたり、耕されたりする。ふつうに考えれば、草刈りや耕起は、植物にとっては生存を危ぶまれるような大事件である。しかし、雑草は違う。草刈りや耕起をして、茎がちぎれちぎれに切断されてしまうと、ちぎれた断片の一つ一つが根を出し、新たな芽を出して再生する。つまり、ちぎれちぎれになったことによって、雑草は増えてしまうのである。

また、きれいに草むしりをしたつもりでも、しばらくすると、③イッセイに雑草が芽を出してくることもある。じつは、地面の下には、膨大な雑草の種子が芽を出すチャンスを伺っている。一般に種子は、暗いところで発芽をする性質を持っているものが多いが、雑草の種子は光が当たると芽を出すものが多い。

学力検査問題［国語］（その四）

（2024 ― 般 Ⅰ）

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

草むしりをして、土がひっくり返されると、土の中に光が差し込む。光が当たるということは、ライバルとなる他の雑草が取り除かれたという合図でもある。そのため、地面の下の雑草の種子は、チャンス到来とばかりに我先にと芽を出し始めるのである。

こうして、(4)きれいに草取りをしたと思っても、それを合図にたくさんの雑草の種子が芽を出して、結果的に雑草が増えてしまうのである。

草刈りや草むしりは、雑草を除去するための作業だから、雑草の生存にとっては逆境だが、雑草はそれを［D］に取って、増殖してしまうのである。何というしつこい存在なのだろう。

（稲垣栄洋、『植物はなぜ動かないのか　弱くて強い植物のはなし』より）

問一　傍線部①～③のカタカナを漢字に直せ。また、空欄Dに入る適語を漢字で記せ。

問二　傍線部（1）「オオバコは踏まれやすい場所に好んで生えている」とあるが、なぜか。その理由を三つ、それぞれ二十五字以内で記せ。

問三　空欄Aに入る適当な言葉を、ア～エから選び、記号で記せ。

ア　油断大敵　　イ　優柔不断　　ウ　負けるが勝ち　　エ　柔よく剛を制す

問四　空欄Bに入る適語を、ア～エから選び、記号で記せ。

ア　楓　　イ　柳　　ウ　松　　エ　桜

問五　傍線部（2）「強情に力くらべをする」とは、具体的にどうすることか。簡潔に説明せよ。

問六　空欄Cに入る適語を、文中から書き抜け。

問七　①　傍線部（3）「そんな気休めのもの」は何を指すか。三十字以内で文中から抜き出し、その最初と最後の三字を記せ。

②　それはなぜ「気休め」といえるのか。簡潔に説明せよ。

問八　傍線部（4）「きれいに草取りをしたと思っても、それを合図にたくさんの雑草の種子が芽を出して、結果的に雑草が増えてしまう」とあるが、なぜ草取りをすると雑草は増えるのか。その理由を二つ、それぞれ二十五字以内で記せ。

学力検査問題［国語］（その五）

（2024 一 般 Ⅰ）

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

3 次のQ＆Aとそれに続く文章を読んで、問一～問四に答えよ。

Q「そのころ、とにかくお金がいった」という言い方は、おかしいのでしょうか。

A　もともと普通の言い方なのですが、近年、おかしいと感じる人も増えています。代わりに、「お金が必要だった」「お金がいる状況だった」などのように言うこともできます。

かたくるしい話から入ると、「イ①った（イッタ）」は、ラ行五段活用の動詞「イ①る（イル）」の過去形です。たとえばこのように使われています。

「私は伊根子に声をかけるのに少々勇気がイ①ったが、呼びかけてからは、言葉はすらすらと出た。」

（辻邦生『椎の木のほとり』１９８８年）

ところが、これはこのところあまり使われなくなっているようなのです。ウェブ上でアンケートをおこなったところ、「いま、とにかくお金がいる」という現在形は「おかしい」と感じる人はほとんどいませんでした。一方「そのころ、とにかくお金がいった」という過去形では、「正しい」と「おかしい」の回答がほぼ半々でした。

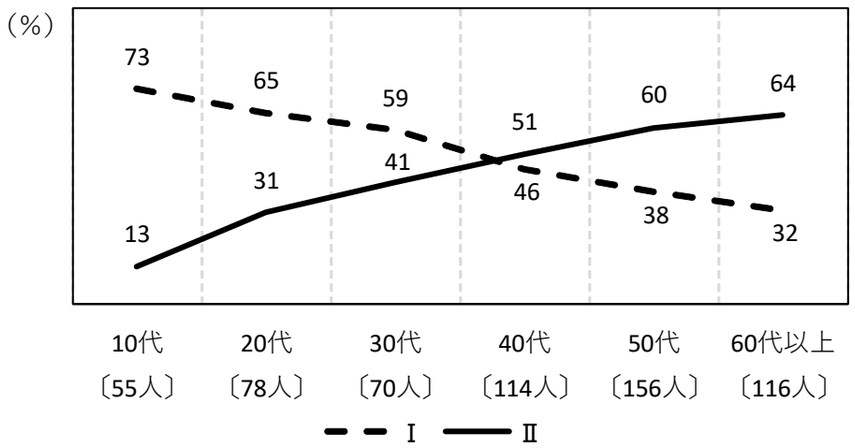
そして年代別には、「『いった』はおかしい」という回答が若い人になるほど多くなっていました。「いった」がだんだん廃れつつあるから、このようになっているのです。

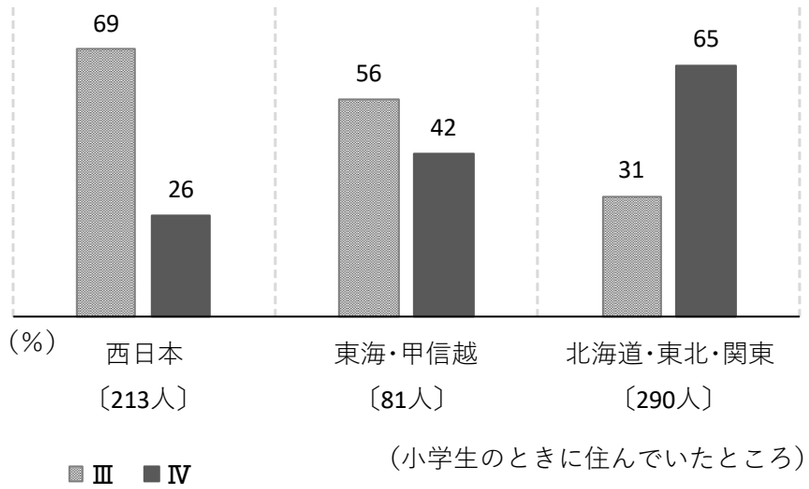
またこの変化は、おもに東日本で先に進行しているようです。東海・甲信越や西日本では、「両方とも正しい」という回答のほうが上回っています（いずれも「小学生のときに住んでいたところ」が基準）。

なぜこのような状況になっているのでしょうか。想像なのですが、「イッタ」という形を持つことばは、「イ①った」だけでなく「イ②った」や「イ③った」もあります（つまり「（　　）語が多い」）。このうち「イ②った」と「イ③った」は非常によく使うことばで、この２つだけでもややこしいのに、そこに「イ①った」まで入ってくると大混乱になるので、避けられているのかもしれません。

なお西日本では、「イ②った（イッタ）」vs.「イ③うた（イウタ or ユータ）」と区別して発音するところが多く、「イッタ」で混乱する余地が比較的小さいために、「イ①った（イッタ）」も健闘しているのでしょう。

（塩田雄大、『変わる日本語、それでも変わらない日本語』より）





（小学生のときに住んでいたところ）

学力検査問題［国語］（その六）

（2024 － 般 Ⅰ）

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一　傍線部①～③のカタカナを漢字に直せ。

問二　空欄に入る漢字四文字の適語を記せ。

問三　波線部「この変化」について、解答欄の表現につながるように、四十字以内で説明せよ。

問四　折れ線グラフⅠ・Ⅱ、棒グラフⅢ・Ⅳは、次のA・Bどちらを表したものか。記号で記せ。

A　「いま、とにかくお金が『いる』」は正しいが、「そのころ、とにかくお金が『いった』」はおかしい

B　「いま、とにかくお金が『いる』」、「そのころ、とにかくお金が『いった』」両方とも正しい

解答用紙［国語］

2024 般Ⅰ

受験番号

1

問一
- ①
- ②
- ③
- ④

問二
- A
- B
- C
- D

問三

問四

問五

問六

2

問一
- ①
- ②
- ③
- D

3

問一
- ①
- ②
- ③

問二

問三

問四
- Ⅰ
- Ⅱ
- Ⅲ
- Ⅳ

という変化

問五

問六
- 問七
- ①
- ～

問七
- ②

問八
- 理由1
- 理由2
- 理由3

解答用紙［国語］

2024 般Ⅰ

受験番号

1

問一 ①宣誓 ②しろうと ③一貫 ④干渉

問二 A ウ　B エ　C イ　D ア

問三 キリスト教全盛の中世は神中心の世界であり、人間中心の世界が生まれるのはルネサンス以後であるとする考え方。

問四 人間も人間の住

問五 抵抗や非難がなく受け入れることに驚きと感動を感じている。

問六 キリスト教の人間中心主義が万物を説明する統一論理を構築しおり、これが近代科学を誕生させる要因になったということ。

2

問一 ①摂理 ②膨張 ③一斉 D 逆手

問二 理由1 他の強い植物が生えることができない場所だから。 理由2 オオバコは踏まれに強い構造をしているから。 理由3 オオバコは踏まれることで種子を運んでもらえるから。

問三 エ

問四 イ

問五 強風を正面から受け止め耐えること。

問六 利用

問七 ①「物事〜キング」

問八 理由1 切断された茎の断片の一つ一つが芽を出すから。 理由2 土中に差し込む光によって種が発芽するから。

問七 ②実際には、悪い状況であることにかわりはないから。

3

問一 ①要 ②行 ③言

問二 同音異義

問三 もともと普通の言い方である「お金がいったん廃れつつある」という過去形が、だんだんもとの言葉に戻りつつある変化

問四 I A Ⅱ B Ⅲ B Ⅳ A